

第1章 紀州のあけぼのと古代人



古墳文化のひろがり



	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
時代	飛鳥・奈良・平安時代
区分	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

秋月古墳と下里古墳

3世紀の中ごろ、畿内^{きない}で初めて古墳^{こふん}がつけられました。これが古墳時代のはじまりです。

和歌山県で初めてつけられた古墳は、和歌山市^{あきづき}の秋月古墳です。この古墳は4世紀の初めにつくられましたが、その後ほとんどがけずりとられたため、死者がおさめられているところは残っていませんでした。周りに弥生時代にもつけられていた方形周溝墓^{ほうけいしゅうこうぼ}5基^きが見つっています。つづいてつけられたのが那智勝浦^{なちかつ}町下里古墳^{しもさと}で、海岸の砂丘^{さきゅう}の上につくられています。全長約60mの前方後円墳^{ぜんぽうこうえんふん}で、周りに濠^{ほり}があります。後円部に細長い^{たてあなし}竪穴式石室^{せきしつ}があり、きれいな石^{つえ}でつくった杖^{つゑ}の一部^{くたたま}や管玉^{くだたま}などが見つっています。

古墳文化の広がり

4世紀の終わりから5世紀の初めごろ、和歌山市^{さらしやま} 晒山^{ふん}1号墳^{いわ}、岩橋千塚古墳^{せんづか}群花山^{くんはなやま}8号墳^{くはな}・花山^{はなやま}10号墳、御坊市^{ごぼう}岩内^{いわうち}3号墳^{かみとんだ}、上富田町^{さんかう}山王^{さんおう}1・2号墳^{さんおう}などがつけられます。この時期には、紀ノ川流域^{りゅういき}から富田川流域^{とみだ}まで、古墳文化が広がっています。ただ、これらの古墳のなかには、1人の人の墓^{はらふ}というよりも家族の墓^{はらふ}としてつけられたものがあり、1つの古墳に何人も葬^{はらふ}られていることがあります。

5世紀の中ごろから終わりにかけてのころ、和歌山市^{しやがのこし}では、紀ノ川の北側^{しやがのこし}の地域^{しやがのこし}で、車駕乃古址古墳^{しやがのこし}・釜山古墳^{かまやま}・大谷古墳^{おおたに}などの大型の古墳^{おおたに}がつけられています。また、紀の川市^{まるやま}丸山古墳^{まるやま}や橋本市^{みさぎやま}陵山古墳^{みさぎやま}は、大型の円墳^{おほあなし}で、丸山古墳^{くみあわせ}には組合式石棺^{くみあわせ}、陵山古墳^{よこあなし}には和歌山県で一番古い横穴式石室^{よこあなし}がありました。和歌山市^{てらうち}岩橋千塚古墳^{まへやま}群大谷山^{まへやま}39号墳^{はちおうじ}・寺内^{てらうち}63号墳^{まへやま}・前山^{まへやま}A17号墳^{はちおうじ}・八王子山^{やまざきやま}8号墳^{はちおうじ}、海南市^{ありだ}山崎山^{まへやま}8号墳^{はちおうじ}・山崎山^{はちおうじ}8-II号墳^{やまざきやま}、有田市^{ありだ}椒古墳^{はしかみ}、御坊市^{ぼんどうおか}阪東丘^{ぼんどうおか}1・2号墳^{ひだか}、日高町^{ひだか}中の谷古墳^{なか}、みなべ町^{しらかや}城山古墳^{しらかや}、白浜町^{しらばま}脇ノ谷古墳^{わき}・権現平^{ごんげんだいら}1号墳^{ごんげんだいら}などもこのころの古墳^{ごんげんだいら}です。

大谷古墳と椒古墳

和歌山市大谷^{おおたに}にある大谷古墳^{おおたに}は、全国的に有名な古墳^{おおたに}です。全長70mの前方後円墳^{ぜんぽうこうえんふん}で、5世紀終わりごろにつくられたものですが、後円部に家形石棺^{いえがたせつかん}があり、その中から人の冑^{かぶと}や甲^{よろい}、刀^{かたな}、劍^{けん}、鏃^{やじり}、金^{かね}や銀^{ぎん}で作った耳飾^{かざ}り、小さな鏡^{かがみ}、銀とガラス玉^{かがみ}の飾^{かざ}り、銅に金や銀のめっきをした帯^{おび}の飾^{かざ}り、鈴^{すず}、勾玉^{まがたま}、管玉^{うすだま}、白玉^{うすだま}などが見つかりました。また、石棺^{いせつかん}の周りから、矛^{ほこ}、鍬^{くわ}、鎌^{かま}、手斧^{てのす}、刀子^{とうす}、のみ、馬^{かば}の冑^{かば}、馬^{よらい}の甲^{よらい}、鞍^{くら}、鏡^{かがみ}などが見つっています。

有田市^{ありだ}にある椒古墳^{はしかみ}は、大谷古墳^{おおたに}とほぼ同じころにつくられており、周濠^{しゅうごう}をもつ帆立貝式^{ほたてがいき}の前方後円墳^{しゅうごう}ですが、今は直径約20mの後円部^{ごんげんぶ}だけしか残っていません。後円部^{ごんげんぶ}には横穴式石室^{よこあなし}があり、和歌山県では古い方の横穴式石室^{よこあなし}です。玄室^{げんしつ}の奥^{おく}にあった石棺^{いせつかん}から石^{いせつかん}の枕^{まくら}、銅^{どう}の鏡^{かがみ}、銅^{どう}に金^{かね}めっきをした帯^{おび}の飾^{かざ}り、管玉^{うすだま}、刀^{やいば}などが、玄室^{げんしつ}から蒙古鉢形冑^{もうこ}、甲^{よろい}、槍^{やり}、鏃^{やじり}、刀^{やいば}、斧^{きりぎりす}、土器^{どき}などが見つっています。

*1 奈良県、大阪府、京都府と兵庫県の一部。

*2 墳丘をとりまく濠のこと。

*3 死者をおさめる部屋のこと。



馬冑（和歌山市大谷古墳 文化庁保管）

馬の冑や甲や蒙古鉢形冑はたいへん珍しいもので、いずれも朝鮮半島との強いつながりを示すものです。馬の冑は国内から2点、朝鮮半島から10点ほど見つかっており、朝鮮半島北部から中国東北地方にかけての地域（高句麗という国があった）の古墳に、馬の冑や甲をつけた馬の壁画がよく見られます。このことから、これらの古墳におさめられた豪族は、朝鮮半島へ出かけたことのある人かも知れません。

岩橋千塚古墳群

和歌山市の岩橋千塚古墳群には、約670基（うち前方後円墳28基）の古墳があるといわれており、全国でも最大クラスの古墳群として特別史跡に指定され、その一部に史跡公園「紀伊風土記の丘」があります。ほとんどの古墳が5

世紀の終わりごろから7世紀の初めごろまでの約100年間につくられています。このころ、古墳を低い山の上につくるようになり、紀ノ川の南側に住んでいた豪族たちがこのあたりの山を共同の墓地としたのでしよう。

以前は、その地域で一番力のある豪族だけしか古墳をつくれませんでした。岩橋千塚古墳群がつくられるころになると、もっとたくさんの人々が古墳をつくれるようになり、横穴式石室がつくられました。このような古墳群を特に群集墳とよんでいます。6世紀後半には、和歌山市から白浜町までの海岸に沿った地域や紀ノ川の流域で、いくつもの群集墳がつくられました。



岩橋千塚古墳群 小さく盛り上がって見える1つ1つが古墳（学生社刊『古墳の航空大観』より転載）

特色のある横穴式石室と石棚・石梁

横穴式石室は、石を積み上げた玄室に、羨道部^{せんどう}をとりつけたもので、羨道部と玄室の入口を扉石^{とびらいし}（大きな板のような石）でふさいでいます。この扉石を開ければ、何度も埋葬^{まいそう}に使うことができます。岩橋千塚古墳群の横穴式石室は、羨道部⇒通廊部^{つうろう}（玄室前道）⇒玄室からできており、通廊部は羨道よりもせまく低くなっています。このような通廊部がある形の石室を特に「岩橋型の石室」とよぶことがあります。

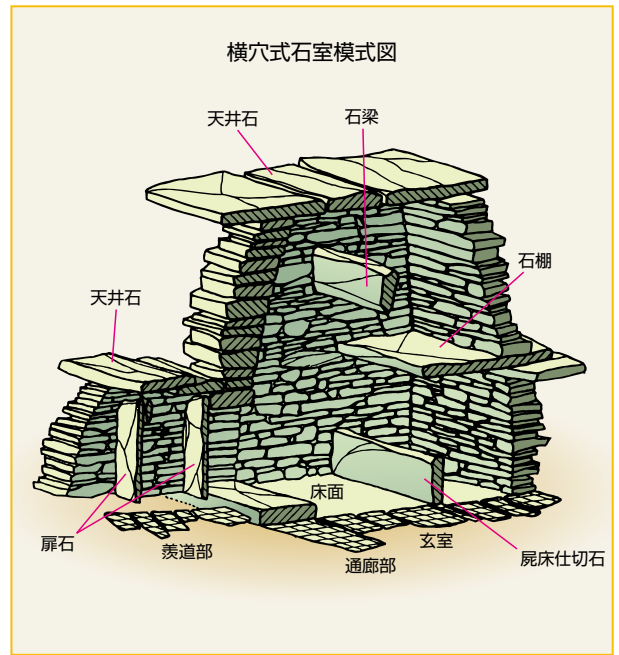
この石室のもう1つの特徴は、玄室に石棚・石梁^{いしはり}を設けたものが多いことです。和歌山県には、石棚がある古墳は52基、石梁がある古墳は23基あります。石梁がある古墳のうち21基には石棚もあります。これらの古墳は、和歌山市を中心に、東は紀の川市まで、南は有田川の北岸まで見つっていますが、一番数が多いのは岩橋千塚古墳群です。石棚・石梁は、初め石室がくずれないように強くするために設けられたものと考えられますが、のちには飾りとして設けられたものもあるようです。石棚がある古墳は、全国的にみると福井県から熊本県までの地域に約130基あります。一方、石梁は県内でも和歌山市と海南市に

* 1 玄室へ入るための廊下のこと。



岩橋千塚古墳群前山A46号墳の
玄室内部
(上に石梁、下に石棚が見られる)

しかありません。
2003(平成15)年
から石棚・石梁をも
つ最も古い古墳の一
つである大日山35
号墳の発掘調査と環
境整備が行われ、和
歌山県で最大の前方
後円墳であることが
わかりました。その
東西の造出しから
家・馬・鳥・人物・
器財などの埴輪がた
くさん発見されてい



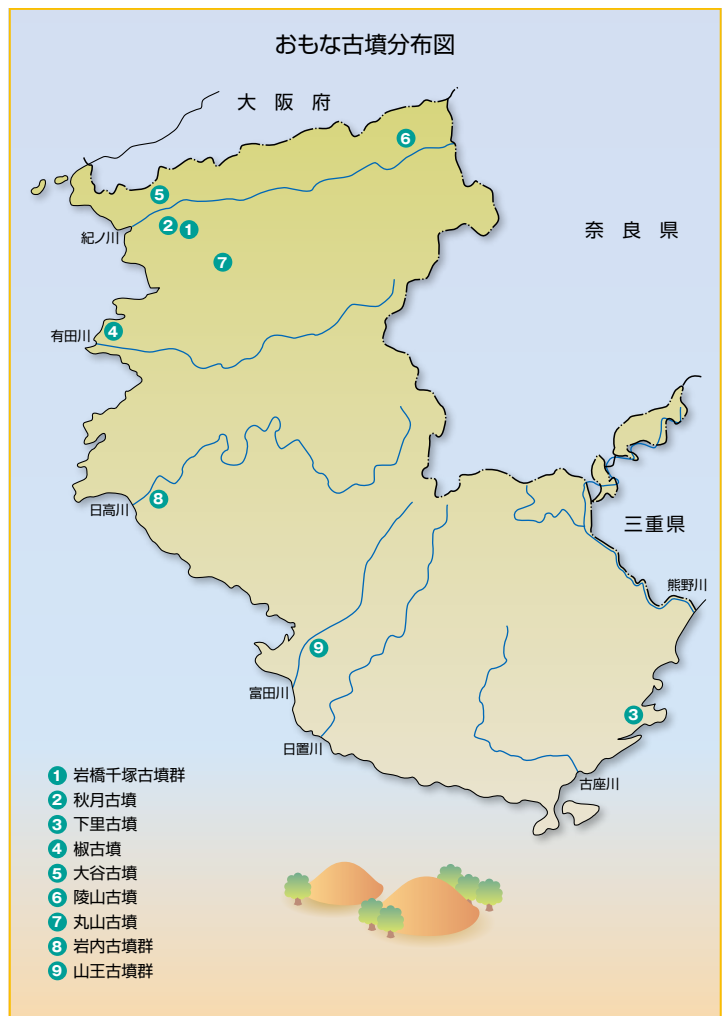
ます。なかでも、前後に顔のある人物・飛んでいる鳥・矢を入れる胡録ころくなどの埴輪は全国的に見てもたいへん珍しいものです。また、同じ頃に作られた継体天皇陵古墳の埴輪けいたいてんのうりょうと似たところがあるといわれています。

古墳の分布の特徴

和歌山県の古墳総数は約1,600基で、周辺の府県に比べてたいへん少ないです。その分布を見ると和歌山市から白浜町までの海岸線に沿った地域には、ほとんど古墳がありますが、すさみ町から新宮市までの地域には、2基しかありません。また、紀ノ川に沿った地域や有田川中流域には見られますが、それ以外の山間部からは発見されていません。古墳がいちばん多いのは紀ノ川平野を中心とする地域で、約1,000基、つづいて御坊市を中心とする地域で約160基あります。たくさんの古墳を作れるということは、多くの人々を支配する力をもった豪族がいたことを示しており、紀ノ川平野の豪族達が他とかけ離れた力をもっていたといえましょう。

このように、約350年にわたって古墳がつくられますが、7世紀の中ごろにはほとんどつくられなくなります。そして、豪族たちは
うじでら こんりゅう そそ
氏寺の建立に力を注ぐようになりました。

*1



- ① 岩橋千塚古墳群
- ② 秋月古墳
- ③ 下里古墳
- ④ 椒古墳
- ⑤ 大谷古墳
- ⑥ 陵山古墳
- ⑦ 丸山古墳
- ⑧ 岩内古墳群
- ⑨ 山王古墳群

*1 自分の家の寺のこと。



わかやまの知識



じんぶつ が ぞうきょう
【人物画像鏡】

橋本市の隅田八幡神社に昔からつたえられてきた鏡で、どこから見つかったかわかりません。日本でようやく漢字を使いはじめたころの貴重な資料で、国宝に指定されており、今は東京国立博物館に保管されています。

この鏡は、円形で、直径が19.8cm、青銅（銅とすずの合金）でできています。中国でつくられた鏡をまねて日本でつくられたものです。ものをうつす面は、文様がある面の裏側です。この鏡のもとになったのは、神人歌舞鏡という、仙人と人間が歌い踊っているところをあらわした鏡です。真ん中の鈕（ひもを通す穴のあるところ）を中心に、放射状に仙人やいろいろな姿の人間があらわされています。

鏡のふちに沿ってぐるっと一周するように、「癸未年八月日十大王年男弟王在意柴沙加宮時斯麻念長寿遣開中費直穢人今州利二人等取白上同二百早作此竟」という48個の漢字が刻まれています。この文章の読み方についてはいろいろな説がありますが、だいたいの意味は、「癸未年、男弟王が意柴沙加宮におられたとき、斯麻という人が長寿を祈って、穢人と今州利の二人に命じて、銅200早を使ってこの鏡をつくらせた」と考えられています。この鏡がつくられた「癸未年」は、60年ごとに巡ってくる年で、西暦443年、503年、563年のいずれかにあたるとされています。

銅の鏡のつくり方は、石または砂で范をつくり、そこへどろどろにとけた銅を流しこんでつくります。范に刻んだ文字や文様はすべて裏返しになるので、范には裏返しの文字や文様を書いておきます。しかし、この鏡の文字や文様の多くが裏返しになっており、これをつくった人は、あまり鏡をつくった経験がなかったのかもしれない。



人物画像鏡（隅田八幡神社蔵）



わかやまの知識



【鳴滝遺跡の巨大倉庫群】

和歌山市鳴滝で、高校を建設するためにその用地を発掘調査したところ、今から約1,600年前の古墳時代につくられた建物の跡がたくさん見つかりました。建物は棟持ち柱のある高床構造で、倉庫と考えられますが、ここで見つかったのは床面積が50～80㎡あり、当時の倉庫のなかでは桁外れに大きいものでした。

このような巨大な倉庫が屋根の向きをそろえ、西側に5棟、東側に2棟が整然と並んで建てられていました。いったい何が納められていたのかはわかりませんが、この倉庫群は古墳時代の紀伊を支配していた豪族である紀氏がつくったものと考えられます。倉庫群は、長く使われることなく取り壊されていますが、柱を抜き取った跡からたくさんの須恵器とよばれる土器のかけらが見つかりました。この土器は、今の朝鮮半島南部の伽耶とよばれた地方独特の形をしており、日本では非常に珍しいものです。紀氏が朝鮮半島の文化を取り入れるほど活躍していた豪族であることをものがたるものといえるでしょう。



発掘現場

* 1 金属を流しこむ型のこと。
* 2 高温で焼き上げられたねずみ色の堅い素焼きの土器のこと。